

# 宗教性発達研究の展開(5)

## —子どもの宗教性を考える—

企画・司会：松島 公望(東京大学)

話題提供者：西脇 良(南山大学)

辻本 耐(大阪大学大学院)

森 真弓(スクールカウンセラー)

指定討論者：森岡 正芳(神戸大学)

### 【企画趣旨】

これまで日本では、子どもの宗教性についてほとんど議論されることはなかった。しかし、幼児期、児童期は「宗教性の萌芽」の時期であり、宗教性発達研究の観点からみても「人がどのように宗教に目覚めるか」について検討することは大変意義あることであるように思われる。

そこで本ラウンドテーブルでは、3つの話題提供〔歴史、調査、臨床〕から子どもの宗教性について議論したいと考えている。まず、戦前の宗教性発達研究に足跡を残した児童心理学者・関寛之に焦点を当て、その業績を振り返る〔歴史〕。続いて、幼児期の子どもを対象とした死後観の縦断的研究から幼児期の宗教性発達について問題提起する〔調査〕。最後に、子どもの神イメージを取り入れた SST を取り上げ、その効果について報告する〔臨床〕。

これらの話題提供を通して、子どもの宗教性が宗教性発達研究に投げかけているものはいかなるものであるのかについて考える機会としたい。

### 【話題提供】

#### ◆「関寛之の業績を振り返る」 西脇 良

大正から昭和にかけて活動した児童心理学者・関寛之（1890-1963）は、高島平三郎（1865-1946）の下で児童学を学び、児童心理学者として出発した。東洋大学で教鞭をとりながら、『児童学に基づける宗教教育及び日曜学校』（1920）以降、心理学に基礎をおく児童期の宗教心の研究に傾注し始め、1944年に発表した集大成の書『日本児童宗教の研究』に至るまで、一貫して宗教心理学に携わり続けた。

本報告では、『日本児童宗教の研究』（1944）の概要を紹介し、彼の宗教性発達理論、および各種調査研究の結果をまとめる。さらに、彼の業績が日本の宗教心理学研究史において、どのように位置づけられるのかについても検討を試みたい。

#### ◆「縦断的研究からみた幼児の死後観の発達の变化」 辻本 耐

宗教性を測定する尺度の多くには、死後の世界を信じているかどうかについて尋ねる項目が含まれている。そのため、幼い子どもの宗教性を検討する際にも、彼らの死後に対する捉え方を把握することは有効だと考えられる。

本発表では、子どもが死後に関する表現を獲得していく過程を手がかりとして、彼らの宗教性発達の萌芽について検討を試みる。調査として、人間および動物の2つの死後観について「（人間および動物は）死んだらどうなるの？」という質問を、幼児期の子どもを対象に実施した。とくに今回の発表では、縦断的なデータを中心に、その発達の变化についての報告を行う予定である。

#### ◆「神イメージ SST の試み」 森 真弓

神イメージ SST の試みは、子どもの問題行動（盗み・虚言・エスケープ等）に対し、その発達成長過程に予防的心理プログラムを導入できないかと苦慮したスクールカウンセラーが試みたソーシャル・スキル・トレーニングである。

ステップ(1)では、児童数十名に、「心の中の神様のイメージ」を絵に描いてもらい、「神様はどんな人？」と質問し、2枚の表にまとめる。神イメージと臨床現場から見えるものは何かを考察する。

ステップ(2)では、SST 対象児童に、①道徳性テストを実施、②低得点項目をチェック、③その項目に対し「この表の神様ならどう思うか」と質問、④再度テストを実施し道徳性得点の変化を見る。その変化は何を意味するかを考察する。